

# 円仁将来目録の研究

—『日本国承和五年入唐求法目録』と『慈覚大師在唐送進録』の諸本の分析—

小 南 沙 月

## はじめに

円仁は承和五年（八三八・唐開成三年）七月、遣唐請益僧として第十七次遣唐使の一行とともに入唐し、揚州・五台山・長安にて求法を行い、会昌の廢仏の嵐が吹き荒れる中、承和十四年（八四七）九月に帰国を果たした。それら求法の成果を記した円仁将来目録三種の『日本国承和五年入唐求法目録』、『慈覚大師在唐送進録』、『入唐新求聖教目録』（以下それぞれ『承和五年目録』、『在唐送進録』、『新求目録』と省略）は円仁の求法の成果を知る上で基本史料となる。この将来目録は、円仁を含む「入唐八家」と称される平安前期に入唐した天台宗・真言宗の僧侶すなわち最澄、空海、円珍、恵運、常暁、円行、宗叡も同様に作成しており、<sup>1</sup> 各々この将来目録を作成することによって自らの求法の詳細を明らかにし、朝廷への入唐の成果を記した報告書としての役割をなしたとされる。<sup>2</sup> この将来目録の内容にはそれぞれ特徴が見られるが、その中でも円仁将来目録三種は天台典籍の他に様々な分野の書目を記載しており、図像や外典も豊富

に含む点で異彩を放っている。これら将来目録の内容を窺う上で知られるのが『大正新修大藏經』<sup>(5)</sup>（以下『大正藏經』と省略）に収録されている活字本である。しかし、円仁の将来目録に関して言うと『大正藏經』を諸本と比較した際異同が多々見られる。また、ともに揚州における求得の法門類を記した『承和五年目録』と『在唐送進録』は、その記載を具に見ていくと書目の内容に若干の相違が見られる。従来円仁の入唐に関する研究は多数存在しているものの、その将来目録の内容分析に関しては、神田喜一郎氏<sup>(4)</sup>、牧田諦亮氏<sup>(5)</sup>による外典についての論考があるが、膨大な外典に関する全面的考証は行われていない。また、『新求目録』に関しては、小野勝年氏による二種の写本を用いた校勘記があるが、本稿では前稿<sup>(7)</sup>で行った『承和五年目録』と『在唐送進録』の校勘は未だに行われていないのが現状である。これを踏まえ、基礎的な考察を行うことに主眼を置き、『承和五年目録』と『在唐送進録』の諸本の概要を整理し、円仁二目録の諸本の間における異同について比定を行うとともに、可能な限り将来物の内容を概観することに努めたい。紙幅の都合上、『新求目録』については別の機会で述べることにする。

## 一 諸本の概要と二目録の校勘

### 1 諸本の概要

本稿では二目録における諸本の概要から考察を進めていくが、この点については、すでに石田尚豊氏の論考<sup>(8)</sup>において述べられており、本章では石田氏の見解を踏まえて各々の写本及び活字本を順に見ていく。はじめに、唐開成四年（八三九・承和六年）四月二十日に在唐中の円仁によって作成された『承和五年目録』の諸本を見ていくと、第一に京

都粟田の天台門跡青蓮院吉水藏旧藏の青蓮院本が挙げられる。現在は独立行政法人国立文化財機構が所有し、京都国立博物館に保管されており、一九七九年、「円仁入唐求法目録〈開成四年四月二十日〉」の名称で重要文化財に指定されている。<sup>9)</sup> 体裁は縦二十七・二センチメートル、横一〇八五・〇センチメートル、一紙二十二行からなる経紙二十九枚をつないで墨書した卷子本とされる。<sup>11)</sup> 表紙には「求法目録在唐前唐院本南第十一」とあり、奥書に「嘉保二年七月十六日於南陽御房一書了、以前唐院之本一之写得也云」と記されていることから、嘉保二年（一〇九五）に「前唐院」の写本すなわち円仁の在世中にその将来品を保管していた比叡山前唐院に安置されていた原本か、またはそれに近い写本を底本としたと見られる。第二に、旧個人蔵本一巻が存在する。これも現在独立行政法人国立文化財機構が所有し、京都国立博物館に保管され、重要文化財の附扱いになっている。<sup>13)</sup> 体裁は縦二十八・五センチメートル、横五〇〇・〇センチメートル、料紙十二紙からなり、罫線は引かれていない。<sup>14)</sup> 『承和五年目録』に続いて『新求目録』の抜抄が記されており、奥書に、「保安四年八月一日於防門殿南亭以二乗房和尚御本一写一得之」、さらに「右書本以三前唐院御本一之写得」とあることから、嘉保二年の前唐院本を保安四年（一一二三）に転写したものであり、原本は青蓮院本と同じであることが窺える。紙背に寛元三年（一一四五）から宝治二年（一二四八）の日付がある文書が確認されていることから、実際の書写年代は鎌倉時代であると見られる。<sup>15)</sup> なお、巻末には明徳二年（一三九二）賢宝の感得記が記されている。第三に、石田氏により「四天王寺本」の存在が指摘されているが、これは奥書がなく上述の個人蔵本に類するものであるとされている。活字本については、『大正藏経』本<sup>16)</sup>は底本が「大谷大学蔵本」という江戸時代刊行のものであること以外は不明であり、『大日本仏教全書』本<sup>17)</sup>（以下『全書』本と省略）は奥書が存在しておらず、写本系統は明らかではない。

次に、『在唐送進録』について見ていく。本目録は、在唐中の円仁から送られてきた将来物に基づき、承和七年（八四〇）正月十九日に比叡山延暦寺で作成されたものである。これも写本が二点存在する。一点目の青蓮院本は、現在青

蓮院門跡吉水藏の別途指定分(旧第三十二箱)に「圓仁在唐送本目録」の名称で収録されており、一九八九年、「円仁入唐請求書目録(承和七年正月十九日)」の名称で重要文化財に指定されている<sup>18)</sup>。卷子本で楮交り斐紙に記され、一紙二十七行からなり、縦二十七・五センチメートル、横三四六・三センチメートル<sup>19)</sup>、七紙を接いで墨書されている<sup>20)</sup>。表紙には「慈覚大師御請求目録」、見返には「青蓮藏本、慶安第二初夏上旬之候加修復了」と記され、内題は「天台法花宗請益圓仁法師且求所送法門曼荼羅并外書等目録」となっている。奥書に「嘉承三年七月一日以三光房律師御本一書写功既畢、院昭」とあることから、嘉承三年(一一〇八)に、三光房律師本を写したものであると見られる。二点目の写本は、小野勝年氏により比叡山南溪藏本が確認されている<sup>21)</sup>。これはかつて比叡山南溪藏に『勘定前唐院見在書目録』をはじめとする円仁関係の十一種の目録とともに「承和七年慈覚大師送三延曆寺三聖教目録」の名で収録されていたようである。その奥書から天明三年(一七八三)、遍照金剛実霊による写本とされている。活字本には、これも『大正藏經』本<sup>22)</sup>、『全書』本<sup>23)</sup>が存在する。『大正藏經』本は『全書』所収本を底本とするが、その『全書』本は奥書がなく、先の『承和五年目録』と同様どの本に基づいたものかは不明である。

## 2 『日本国承和五年入唐求法目録』の校勘

これら諸本の内容を踏まえ、本研究では現存最古の写本である青蓮院本を底本に定めて翻刻を行い、諸本との校合作業を行い、異同を記した校勘記を資料として掲げた。以下、書目に付したローマ数字は便宜上目録の書目を記載の順番で付したものである。この資料編の二目録を指す場合はそれぞれ「承和五年目録」(資料①)「日本国承和五年入唐求法目録」(「在唐送進録」(資料②)「慈覚大師在唐送進録」)と記載する。ここでは、諸本の間で異同が見られる書目を考察の対象として取り上げ、『大正藏經』収載の仏典や安然(八四一?—九一五)が入唐八家の将来物を網羅して整理を

行つた『諸阿闍梨真言密教部類総録』<sup>25</sup>（以下通称である『八家秘録』と省略）の記載を参照して異同を検討するとともに、その内容が分かる書物については簡潔に紹介し、円仁将来物の概要を把握する手がかりとする。書目の表記については文字の異同を確認するため常用字体に改めず、旧字体・異体字など全て青蓮院本の記載に従い、異同において一定の特徴が見られる箇所は初出のみ取り上げた。活字本には脱漏が認められることもあり、それらを示すために煩を厭わず、網羅的に異同を記した。書写年代の古い写本が異体字を多用し、一方活字本が旧字を規範としていることは言うまでもないが、このような常識の範囲内の点についても記すこととした。本文中で用いる「活字本」とは『大正藏経』本・『全書』本の両方を指し、「他本」は青蓮院本以外の写本及び活字本を指す。はじめに「承和五年目録」を取り上げ、青蓮院本を底本として個人蔵本、『大正藏経』本、『全書』本における文字の異同の比較を行う。なお、前節で見たように青蓮院本、個人蔵本ともに現在では所蔵先が異なっているが、従来の研究に従い各々の収蔵先の名称を用い、青蓮院本については「青本」と省略した。また、「在唐送進録」、『新求目録』の記載も参照した。『新求目録』の写本は青蓮院本及び京都榎尾高山寺本、活字本は先に挙げた『大正藏経』本と『全書』本<sup>26</sup>を使用した。なお、仏典の全項目の内容については主に『仏書解説大辞典』<sup>28</sup>、『大藏経全解説大事典』<sup>29</sup>の見解に基づき、以下各項目の末尾に括弧で依拠した文献の名称を記した。

まず、巻頭に揚州にて求めた経卷、曼荼羅などの総数が記載されているが、青本が数字に大字を用いているのに対し、個人蔵本は正字を使用している。異体字の「柒」を『大正藏経』本は正字の「漆」とする。また、略字の「并」を活字本は正字の「并」としており、この記載の特徴は以後多数見られる。

1 『大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘経』一卷 『大正藏経』第二十一卷・No.一二五三に当たり、唐の不空（七〇

五―七七四) 訳である。雑密に属する經典で吉祥天女法の功德が説かれる。

3 『寶星經略述并八宿佉盧瑟吒仙人經』 一卷 「廿」の俗字である「卅」を『大正藏經』本は「二十」とする。この記載の特徴は本目録の63などにも見られる。

4 『陀羅尼集要經』 一卷 俗字の「陀」を他本は正字の「陀」とする。この記載の特徴は32など他の箇所でも見られる。『大正藏經』第十八卷・No.九〇一に阿地瞿多(生没年不詳) 訳『陀羅尼集經』十二卷(あるいは十三卷)が見える。諸種の密教經典・儀軌を集成したものである(『大藏經全解説大事典』、以下『大藏』と省略)。

5 『蘇摩呼童子請經』 一卷 俗字の「蘇」を活字本は正字の「蘇」とし、個人藏本は「請」の下に「問」を補う。『大正藏經』第十八卷・No.〇八九五に『蘇婆呼童子請問經』三卷十二章があり、別本、異訳も存在する。唐の善無畏(六三七―七三五)による訳で諸々の真言行に関する軌則が説かれた經典である(『大藏』)。

6 『新譯般若心經』 一卷、般若三藏譯 本經典は玄奘訳(『大正藏經』第八卷・No.二五二)をはじめとするいくつかの翻訳が存在する。般若(生没年未詳)は北インド出身で唐代の訳經僧である(『大藏』)。

8 『金剛頂蓮花部心念誦儀軌』 二卷 「花」を他本は「華」とする。この異同は他の箇所でも見られる。『大正藏經』第十八卷・No.八七三に不空訳が一卷あり、円仁は二卷本を將來したようである。金剛界中の蓮華部に基づき四会の念誦法を説く(『大藏』)。

9 『觀自在菩薩如意輪念誦儀軌』 一卷、大興善寺不空譯 『大正藏經』第二十卷・No.一〇八五に当たり、本儀軌の内容は四度化行の如意輪法次第の原本である(『仏書解説大辞典』以下『仏書』と省略)。

次に「已上九部一十卷同帙」とあり、『全書』本は「二十」を「一千」とするが、青本の記載が正しい。

10 『金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩脩行儀軌』 一卷 最初の「千」を『全書』本は「于」とし、二番目の「千」を個

人蔵本は欠くが誤りである。『大正蔵経』第二十卷・No. 一〇五六に不空訳の『金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌経』二卷が見え、このうちの二卷を将来したのである。実際には不空の著作であるとされる。千手千眼觀自在菩薩像の壇法に関する内容である（『大蔵』）。

11 『普賢菩薩金剛薩埵瑜伽念誦儀軌』一卷、大興善寺沙門 活字本は大興善寺の後に「不空譯」の字を補う。『大正蔵経』第二十卷・No. 一二四『普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌』に当たり、金剛薩埵法六種儀軌の一つで普賢金剛薩埵の身成就の法を説く（『仏書』）。

12 『金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀』一卷、「密」の字を個人蔵本は欠き、俗字の「脩」を他本は正字の「修」とする。この記載の特徴も随所で見られる。『大正蔵経』第二十卷・No. 一二五の不空訳にあたる。金剛薩埵五秘密法の本軌である（『仏書』）。

13 『金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀』一卷、大興善寺 他本は「儀」の下に「軌」の字を補う。『大正蔵経』第二十卷・No. 一一二〇は青本と同じ記載であり、No. 一一一九『大樂金剛薩埵修行成就儀軌』と同本とされる。金剛界中の金剛薩埵の儀軌である（『仏書』）。

14 『觀自在如意輪菩薩瑜伽法要』一卷 金剛智譯 「譯」を個人蔵本は欠く。『大正蔵経』第二十卷・No. 一〇八七に当たり、No. 一〇八五『觀自在菩薩如意輪念誦儀軌』の説明を補ったNo. 一〇八六の不空訳『觀自在菩薩如意輪瑜伽』と同様の内容とされる（『仏書』）。

17 『葉衣觀自在菩薩法』一卷 『大正蔵経』第二十卷・No. 一一〇〇に不空訳『葉衣觀自在菩薩経』一卷が存在するが同じ仏典であろうか。この仏典は觀自在菩薩が葉衣觀音の陀羅尼や心真言とその功德などを説くとされる（『大蔵』）。

- 19 『阿闍如来念誦供養法』一卷、不空金剛譯 『大正藏經』第十九卷・No.九二二に当たり、阿闍如来の供養念誦の行法を示したものである（『仏書』）。
- 次行に見える「已上十一部二十卷同帙」の「十一」を他本は「二十」とするが、青本の誤りである。
- 21 『金剛頂経瑜伽十八會指歸』一卷、大興善寺沙門不空譯 活字本は「沙門」の二字を欠く。『大正藏經』第十八卷・No.八六九に当たり、金剛頂経十万頌十八会及び各界所説の内容を概説した梵本大本『金剛頂経』の解題書である（『仏書』）。
- 22 『佛頂尊勝陀羅尼注義』一卷、大興善寺沙門不空譯 『大正藏經』第十九卷・No.九七四に当たり、尊勝陀羅尼を対訳漢字に記した注釈書である（『仏書』）。
- 23 『最上乘教授戒懺悔文』一卷、大興善寺沙門不空譯 俗字の「取」を活字本は正字の「取」とする。『大正藏經』第十八卷・No.九一五『受菩提心戒』に当たり、真言密教の受法の僧が菩提心戒を授かる際の戒文である（『仏書』・『大藏』）。
- 24 『大元阿吒薄旬無邊甘露降伏一切鬼神真言』一卷 「大」を活字本は「太」とする。正字の「無」を個人蔵本は異体字の「无」とするが、この記載の特徴は32、64など他の箇所でも見られる。「露」を個人蔵本は「呂」とする。『八家秘録』巻下にも活字本と同様の記載が見られる。
- 25 『火壇供養及供養十天法』一卷 「火」を個人蔵本は「大」とし、『八家秘録』巻下も同様であるが、この他にこの仏典を記載する文献は見当たらず、考察を要する。
- 27 『大樂金剛不空眞實三昧耶経般若波羅密多理趣釋』一卷 「密」を他本は「蜜」とする。『大正藏經』第十九卷・No.一〇〇三に他本と同じ書名で不空訳の二巻があり、このうち一巻を将来したことが分かる。不空訳『大樂金剛不

空真実三麼耶經』(『大正藏經』第八卷・No.二四三)の注釈書である(『大藏』)。

28 『梵漢兩字大毗盧遮那經字輪品悉曇』一卷 正字の「毗」を活字本は俗字の「毘」とする。次に、「遮」を活字本は「舍」とする。この異同は60などにも見られる。

29 『梵漢兩字金剛般若經』二卷 『大正藏經』第八卷・No.二三五に鳩摩羅什訳『金剛般若波羅蜜經』があるが、こちらは一卷である。般若經典の一つであり、「空」の用語を用いずに空を説く經典とされる(『岩波仏教辞典』<sup>30</sup>)。

30 『梵漢兩字阿弥陀經』一卷 『大正藏經』第十二卷・No.三六六『仏説阿弥陀經』の梵漢対訳版か。浄土三部經の一つであるが、阿弥陀仏の名号の執持により極楽世界に往生できることなどを説く(『岩波仏教辞典』)。

34 『梵漢兩字青頸大悲真言』一卷 「頸」を活字本は「□、頸カ」とするが、青本の記載で確定できる。

次に、37 『梵漢兩字灌頂真言』一卷、45 『梵漢兩字大随求大結讚』一卷の二点の書目が活字本に見られないが、脱漏であると考えられる。

42 『梵漢兩字普賢行願讚』一卷 『大正藏經』第十卷・No.二九七の不空訳『普賢菩薩行願讚』一卷の梵漢対訳版である。No.二九三『大方広仏華嚴經』第四十卷の普賢菩薩が説く部分が別行されたものであり、普賢菩薩の十大願を説いた頌文である(『仏書』・『大藏』)。

52 『梵漢兩字觀自菩薩讚』一卷 活字本は「自」の下に「在」の字を補うが、活字本の記載が正しい。

55 『梵漢兩字文殊師菩薩讚』一卷 「文殊師」を個人蔵本は「文殊菩薩」、活字本は「文殊室利」とするが、青本の記載は「利」を欠いている。

64 『浄名経記』五巻一帙、無量義寺文襲述 「襲」を活字本は「襲」とする。「在唐送進録」51にも同様の異同が見られる。正式名は『浄名経関中疏記』である(『大正藏經』第五十五卷・No.二一八三『東域伝灯目録』巻上)。次に

見える唐道液述『浄名経集解関中疏』と関連する書物であろう。

65 『浄名集解関中疏』四卷、資聖寺道液集「開」を活字本は「關」、「聖」を「正」とする。『大正藏經』第八十五卷・No.二七七七『浄名経集解関中积抄』に当たり、長安資聖寺の僧道液による僧肇（三八四—四一四？）述『注維摩詰経』（『大正藏經』第三十八卷・No.一七七五）に対する解釈書である。道液が唐上元元年（七六〇）に著し、永泰元年（七六五）再度著述したものである（『大藏』）。

66 番の次行に見える「已上二部六卷同帙」の「帙」を活字本は「帖」とする。

67 『法華経銷文略疏』三卷一帙、天長寺釋迦延秀集解「釋」を個人蔵本は「尺」、活字本は「迦」を欠く。「在唐送進録」48は『法花経略疏』とする。書名については『新求目録』の諸本も本目録と同様の記載である。竺道生（？—四三四）述『法華経疏』（『統藏經』二乙・二三・四）、『大正藏經』第八十五卷・No.二七四九『法華経疏』など類似的の書物が現存しており、本書もそれらと同様『妙法蓮華経』の注疏と思われるが、詳らかではない。

69 『肇論抄』三卷、牛頭山幽西寺惠澄撰「惠」を活字本は「慧」とし、「澄」を活字本は「證」とする。『新求目録』の写本も青本と同様の記載である。『神会語録』に見える唐代の禪師惠澄と同一人物であると思われる。この異同は次行の70など他の箇所でも見られる。僧肇による『肇論』一卷（『大正藏經』第四十五卷・No.一八五八）に関する注釈書が多く存在しているが、本書もこのうちの一つであろう。

70 『肇論文句圖』一卷、惠澄撰『智証大師請来目録』（『大正藏經』第五十五卷・No.二一七三）に「肇論文句」一卷、惠澄」が見えており、円仁将来本と同じ書物であろう。

71 『肇論略出要義兼注附焉并序』一卷、沙門雲興撰「雲」を活字本は「靈」とする。「在唐送進録」56、『新求目録』も同様に異同が見られるが、この僧侶については未詳である。

- 72 『因明揉抄』三卷、章敬寺擇隣述 「揉」を他本は「糶」とする。この書目は「在唐送進録」では活字本のみ記載があるが、こちらにも「糶」とし、『新求目録』の諸本の記載も同じである。『智証大師請来目録』に『因明疏糶抄』三巻が見え、同様の書物であると思われる。「敬」を個人蔵本は「教」とするが、大暦元年（七六六）、長安の東門に建立された「章敬寺」と確定できる。<sup>32)</sup>
- 73 『因明義断』一卷、大雲苾芻沼述 『大正藏經』第四十四卷・No.一八四一の慧沼（六五〇―七一四）撰『因明入正理論義断』に当たる。他師による因明学説を批判した慈恩大師窺基（六三二―六八二）の『因明入正理論疏』（『大正藏經』第四十四卷・No.一八四〇）に次いで尊重される因明学の祖書である（『仏書』）。
- 74 『因明入正理論纂要』一卷、大神龍寺沼集 「大神龍寺沼集」の「沼」を活字本は「□、沼カ」とする。前行で見たと73『因明義断』の撰者を指しており、「沼」と確定できる。『大正藏經』第四十四卷・No.一八四二の慧沼述『因明入正理論義纂要』に当たり、本目録の諸本は「論」の字を欠いていることが分かる。『因明義断』一卷の姉妹編として窺基の因明の要義を集めた因明研究の指南書として重視される（『大蔵』・『仏書』）。
- 80 『五方便念佛門』一卷、智者大師述 「智者大師述」の「師」を活字本では「□、師カ」とする。智顛（五三八―五九七）の別称である智者大師であることは明らかであるが、この他の箇所でも活字本は「師」の字を判読不明としており、この点疑問である。『大正藏經』第四十七卷・No.一九六二『五方便念佛門』に当たり、五種の念仏する方法を主とした念仏の意義を略説したものである。本書の著者が智顛かどうかは不明とされ、その内容は念仏を五種に分類して説いたものである（『大蔵』）。
- 82 『四十二字門義』一卷、南岳思大師作 「門」を活字本は「開」とするが、「在唐送進録」44、『新求目録』の諸本においても「門」としており、この字で確定できると思われる。また、「南岳思大師作」の「師」を活字本は欠き、

- 「師カ」と記すが、慧思（五八八―六四二）の別称である南岳思大師の「師」と確定できる。
- 83 『釋門自鏡録』五卷、僧惠詳集 『大正藏經』第五十一卷・No. 二〇八三に懷信の著述による成立年代不明の同名の仏典が二卷見え、円仁将来本は異訳であろう。懷信の晩年の作で十科からなる仏教説話集である（『仏書』・『大藏』）。「在唐送進録」53にも見られる。
- 85 『形神不滅論』一卷、靈溪沙門海雲撰 個人藏本は「溪」を「漢」とするが、『新求目録』の諸本も「溪」とし、この字で確定できよう。海雲は『両部大法相承師資付法記』（『大正藏經』第五十一卷・No. 二〇八一）の著者であろう。
- 86 『法花三昧修證決』一卷 「決」を活字本は仮借字の「訣」とする。いかなる書物かは未詳である。
- 88 『鳩摩羅法師隨順修多羅四悉檀義不墮負門』一卷 「墮負」を活字本は「負墮」、『新求目録』の高山寺本は「隨員」とする。他の文献にもこの書目は見当たらず考察を要する。
- 90 『量處重輕儀』一卷、道宣絹叙 「重輕」を活字本は「輕重」、「絹叙」を「緝集」とするが、『大正藏經』によると青本の記載は誤りである。すなわち、『大正藏經』第四十五卷・No. 一八九五『量處輕重儀』一卷に当たり、貞觀十一年（六三七）に道宣（五九六―六六七）が編集し、乾封二年（六六七）に訂正を行い、律によって亡僧の遺品の輕重を定めた内容とされる（『大藏』）。
- 92 『略羯磨』一卷、西大原寺懷素撰 「西大原寺懷素」の「懷」を個人藏本は欠く。『在唐送進録』64、『新求目録』の写本も「懷」の字を記す。『東域伝灯目録』巻下は青本と同様の記載である。懷素は『宋高僧伝』巻第十四（『大正藏經』第五十卷・No. 二〇六一、七九二頁）に「釋懷素、姓范氏、其先南陽人也」と見える律師である。
- 93 『說罪要行法』一卷、義淨三藏撰 『大正藏經』第四十五卷・No. 一九〇三に当たり、義淨（六三五―七一三）に

よって唐天冊万歳元年（六九五）―先天二年（七二三）の間に成立した。比丘が犯罪を告白する作法などを述べた書物である（『大蔵』）。

94 『諸天地獄壽命分限』一卷、終南山宗叡撰 「在唐送進録」91では「一卷」を「一帖」とする。

96 『最上乘佛性歌』一卷、沙門真覺述 「乗」を個人蔵本は「実」とし、「在唐送進録」68の諸本は「最上乘」の三字を欠く。禅門に関する『最上乘論』（『大正藏經』第四十八卷・No.二〇一一）などの典籍があり、「乗」とするのが正しい。本書も『最上乘論』に関連する内容であろう。

97 『大乘楞伽正宗決』一卷 「決」を活字本は脱するが、「在唐送進録」59、『新求目録』の諸本も「決」と記し、活字本は脱字である。これも未詳の書物である。

98 『隋廬山遺愛寺慧珙禅师念佛三昧指歸』一卷 「慧珙」を個人蔵本は「恵珙」、活字本は「慧珍」とする。禅師の名前については「在唐送進録」72、『新求目録』にも異同が見られるが、この僧侶についても詳細は詳らかではない。

99 『梵語雜名』一卷 『大正藏經』第五十四卷・No.二一三五に成立年代不明の唐の礼言による同名の書物が見える。漢語と梵語を対訳させ注釈を施した悉曇字引である（『大蔵』）。

100 『四條式并大小乗戒決』一卷 『新求目録』の諸本は「式」を「戒」としており考察を要する。

101 『南岳思禅師法門傳』二卷、衛尉承杜拙撰 「丞」の仮借字である「承」を活字本は「丞」と記す。「在唐送進録」79にも同じ異同が見られる。

102 『天台大師答陳宣帝書』一卷 「宣」を活字本は「宜」とするが、南朝陳の宣帝（五三〇―五八二）のことであり、青本の記載が正しい。

103 『天台略録』一卷 正字の「略」を『全書』本は異体字の「畧」とする。この記載の特徴は他の箇所でも見られる。

- 104 『智者塚松讚』 一卷、頂禪師撰 「塚」を個人蔵本は「極」、『大正藏經』本は「塚」、『全書』本は「塚」とするが、この書目も未詳である。
- 105 『天台智者大師十二所道場記』 一卷、灌頂述 「灌頂」を活字本は異体字の「汀」とする。隋の灌頂（五六一—六三二）による智顛に関する書物であろう。
- 106 『法花靈驗伝』 二巻 巻数を活字本は「二」巻とするが、「在唐送進録」54、『新求目録』の諸本も「二」巻とする。現存する明清時代の二種の版本によると、撰者は一二九〇年代—一三一〇年代に活躍したとされる高麗の了円であり、『法華経』に関する多数の靈驗説話を集めたものであるとされる。<sup>33</sup>
- 108 『清涼山略傳』 一卷 『大正藏經』第五十一巻・No.二〇九八に唐代の慧祥（生没年不詳）撰『古清涼伝』二巻が見えている。円仁將來本がこの書物の簡略版であるかどうかについては検討を要する。
- 109 『大唐韶州雙岑山曹溪寶林傳』 十巻一帙、會稽沙門雲徹字明泳 活字本は「韶」を「部」、「岑」を「峯」、「雲」を「靈」とする。『新求目録』の諸本も「靈」とし、この字で確定できよう。本書は『大唐双峰山曹候溪宝林伝』十巻、通称『宝林伝』に当たる。朱陵の沙門智（慧）炬によって貞元十七年（八〇二）に成立し、六祖慧能の南宋禅の由来を明らかにした書物である（『禅学大辞典』<sup>34</sup>）。「在唐送進録」89の青本は『佛史寶林傳』一卷二帖、活字本は『曹溪寶林傳』十帖二帖、『新求目録』の諸本は巻数を「二巻」とし、それぞれ巻数に相違がある点は疑問である。
- 110 『上都清禅寺至演禅師鍾傳』 一卷、大理牛肅与僧至演同叙 「寺」を活字本は「師」とする。「在唐送進録」74も青本と同じ記載であるが、『新求目録』の諸本においても異同が見られる。この書物も未詳である。
- 111 『南荊州沙門無行在天竺國致於唐國書』 一卷 個人蔵本は「州」を「洲」とし、活字本はこの字を欠く。「書」を個人蔵本は「画」の旧字である「畫」とし、活字本はこの字を欠くが、円仁が唐より帰国後の斉衡二年（八五五）

に著した『蘇悉地羯羅經略疏』（『大正藏經』第六十一卷・No.二二二七、四三二頁）にも「南溪州沙門無行在三天竺國、致於唐國諸大德書」云と見え、「書」と確定できる。

114 『觀法師奉答皇太子所問諸經了義并錢』一卷 活字本は題名を「上都雲華寺泳字大觀法師奉答皇太子所問諸經了義竝錢」とし、113 『集新旧齊文』五卷の「上都雲花寺泳字太」を冒頭に記している。「在唐送進錄」73は『觀大師諸經了義』一卷とする。『新求目録』の諸本においても異同が見られ、考察を要する。

117 「唐故大廣禪師大和楞伽峯塔碑并序」一卷、陸巨撰 活字本は「大和」の下に「上」を補う。『新求目録』では「全書」本のみ「上」の字を記す。また、「峰」の同字である「峯」を活字本は正字である「岑」とする。撰者は『宋高僧傳』卷第十一（『大正藏經』第五十卷・No.二〇六一、七七四頁）に「越州刺史陸巨」と見える人物であろうか。

118 『唐故大律師釋道圓山龕碑并序』一卷、李邕撰 『全書』本は「唐」を「□」、唐カ」とするが、『新求目録』の諸本も青本と同様の記載であり、「唐」と確定できる。「龕」を活字本は「龔」とする。唐代の文人、書家として名高い李邕（六七八―七四七）は、『新唐書』卷五、玄宗皇帝、李隆基、天寶六載に「北海郡太守李邕」とその名が見える。

119 『大唐大慈恩寺翻經大德基法墓誌銘并序』一卷 「德」の下に個人藏本は「墓法」、活字本は「師」の字を補う。『新求目録』にも同様の異同が見られる。74でも触れたが、唐代に法相宗を創始した窺基を指しており、活字本の記載で確定できる。

120 『大慈恩寺大法師基公塔銘并序』一卷 小野氏の研究<sup>35</sup>においてその内容が紹介されており、それによると唐永淳元年（六八二）に没した窺基が玄奘法師塔に埋葬されたことなどが記されているようである。

124から131は外典が占めており、そのうち129までは神田氏<sup>(36)</sup>によって考証が行われているため、その見解に基づき内容の明らかな書目を取り上げる。

124 『大唐新修定公卿士庶内族吉凶書儀』卅卷、鄭餘慶重修定 冊数を活字本は「一」とする。『新求目録』の諸本も三十卷であるが、神田氏の考証では、三十卷は三十章あるいは三十篇の誤りであり、『新唐書』卷五十八、藝文志の史部儀注類に「鄭氏書儀二卷、鄭餘慶」と見えていることから、それに基づき何人が作った吉凶書儀三十章ではないかとされる。

125 『開元詩格』一卷、徐隱泰字蕭然撰 「泰」を活字本は「秦」とする。『新求目録』の青本も「泰」としており、この字で確定できると考えられる。開元年間（七一三―七四二）の詩人である王昌齡の詩格すなわち詩の作り方の規則ではないかとされる。

127 『判一百條』一卷、駱賓王撰 『新唐書』卷六十、藝文志、別集類に見える「駱賓王百道判集一卷」と同じ書物であり、一種の文学作品であると見られる。

128 『祝元膺詩集』一卷、『唐詩紀事』卷五十六に晩唐の詩人祝元膺の名が見えており、当時流行の詩集であったとされる。

129 『杭越寄和詩集并序』一卷 「在唐送進録」115にもあるが、『宋史』卷二〇九、藝文志に「元稹、白居易、李諒杭越寄和詩集一卷」が見える。

131 『法花廿八品七言詩』一卷 「詩」の下に活字本は「集」の字を補う。「在唐送進録」92の写本は題名を『七言法花經詩』五十七首一帖としている。

132 「大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅」一鋪、五幅白畫 個人蔵本は「胎」を「台」とする。

- 133 「金剛界大曼荼羅」一鋪、七幅 「幅」を個人蔵本は「福」、活字本は「帙」とする。『新求目録』には「綵色」の二字があり、着色された曼荼羅であったことが窺える。
- 140 「南岳思大師示先生骨影」一鋪、三幅 「三」を個人蔵本は「一」とする。「在唐送進録」102の青本は「三副」とする。『新求目録』の諸本も「三」としており、「三」と確定できよう。これも『新求目録』では「綵色」の字を補っており、着色が施されていた慧思に関する影像である。
- 141 「天台大師感得聖僧影」一鋪、三幅 この書目を活字本は欠く。『新求目録』によると、これも着色されていた智顛の真影である。
- 143 「法恵和上闍王前誦法花影」一張 活字本は「恵」を「慧」、「花」を「華」とする。この異同はこれ以降の高僧真影においても同様である。「在唐送進録」には109、114に「法恵禪師」の影像が見えるが、後述する本目録の151にも「法恵禪師」の影像が見え、どちらに該当するのかは未詳である。『新求目録』の諸本の記載は青本と同様である。
- 146 「膜禪師誦法花善神來聽經影」一張 「膜」を活字本は「映」とする。「在唐送進録」107は「映」の俗字である「映」とし、『新求目録』の諸本においても同様の異同が見られる。円仁目録以外に見えず、未詳の影像である。
- 148 「恵向禪師誦法花滅後墓上生蓮花及墓裏常有誦經聲影」一卷 「有誦」を活字本は「誦有」とするが、「在唐送進録」108は「恵向禪師影一張」のみとし、『新求目録』の記載は青本と同じである。「恵向禪師法花を誦へ滅後墓上に蓮花を生ずるに及び墓裏常に経を誦ふる声有るの影」と読むと考えられ、青本の記載が正しいであろう。
- 151 「法恵禪師誦法花口放光照室宇影」一張 「口」を個人蔵本は「張」とするが、『新求目録』の諸本も青本と同様である。「法恵禪師法花を誦へ口より光を放ち室宇を照らすの影」と読むと考えられ、「口」と確定できようであろう。
- 152 「大聖僧伽和尚影」一張 「張」を活字本は「卷」とするが、「在唐送進録」104も「張」とし、『新求目録』の諸本

も青本の記載と同様である。描かれている泗州大聖・僧伽和尚（?—七一〇）は、十一面観音の化身及び航路安全神として唐代に民間信仰の対象とされてきたようである。<sup>37)</sup>

153 「舍利五粒 三粒菩薩舍利、盛瑠璃小瓶、二粒支佛舍利、盛白蠟小合子、並納白石壺子」 「三粒、二粒」の「粒」を活字本は欠く。「瑠璃」を個人蔵本は「玉玉」とする。また、「瓶」の下に活字本は「子」を補う。異体字の「蠟」を活字本は正字の「蠟」、「並」を個人蔵本は「并」、活字本は「並」の異体字である「竝」とする。この仏舍利は「在唐送進録」には記載が見られない。『新求目録』の諸本においても異同が見られる。

次行に記される末尾の一行目、「前件法門等」の「前」を活字本は「右」と記す。二行目の「有」、「之語」、三行目の「府」を活字本は欠く。また、四行目「弘」を個人蔵本は「和」とする。直前の文字は「弁」の俗字である「璽」であり、海雲記『兩部大法相承師資付法記』上（『大正藏經』第五十一卷・No.二〇八一、七八四頁）に「沐浴辨弘」とその名が見えており、「弘」と確定できる。六行目、「向」を活字本は「問」とするが、「天台に向かふを擬り」、すなわち円仁が天台山へ赴くことを計画した意であると考えられるため、青本の記載が正しいのではないであろうか。「有」の下に個人蔵本は「之」を補う。八行目の「傳燈法師位」を個人蔵本は「傳燈大法師」とする。円仁に伝燈大法師位を授けられたのは嘉祥元年（八四八）六月二十七日のことであり、青本の記載で確定できる。<sup>38)</sup>

### 3 『慈覚大師在唐送進録』の校勘

次に、「在唐送進録」（資料②）の青蓮院本と活字本との記載の相違を見ていく。本目録に見える書目の大半は「承和五年目録」にも存在しており、ここでは異同について述べるにとどめ、前節で異同を見た書目については省略する。

「承和五年目録」に記載されていない書目のうちその内容が知られるものは簡潔に取り上げる。

冒頭一行目、「花」を活字本は「華」とし、略字の「并」を活字本は正字の「并」とする。二行目、「和上」の「上」を活字本は「尚」とする。異体字の「捻」を活字本は正字の「總」とする。このような記載の特徴は本目録の随所にわたって見られる。

2 『新譯般若心經』一卷、般若三藏譯 「心」を活字本は欠くが、無論誤りである。

3 『梵漢對譯阿彌陀經』一卷 俗字の「陀」を活字本は正字の「陀」とする。この記載の相違は本目録の24など他の箇所でも見られる。

4 『一切佛心中心經』一卷 活字本は「經」の上の「心」の字を欠く。「承和五年目録」2の諸本及び『新求目録』の諸本、『八家秘録』巻上も青本の記載と同じであり、「心」を補う必要がある。

7 『寶星經略述廿八宿住蘆瑟吒仙人經』一卷 「廿」を活字本は「二十」とする。

8 『蕪婆呼童子經』一卷 俗字の「蕪」を活字本は正字の「蘇」とする。「童」を『全書』本は「重」と記すが誤りである。

9 『金剛般若波羅密經』一卷 「密」を活字本は「蜜」とする。10 『金剛般若波羅密經』の記載も同じである。「承和五年目録」29と異なり、本目録では一卷ずつ記している。

13 『梵漢兩字法花儀軌』一卷 「花」を活字本は「華」とする。

19 『梵漢兩字金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵儀軌』一卷 「金剛」を活字本は「菩」とする。「承和五年目録」13でも見たが、『大正藏經』第二十卷・No. 一一二〇『金剛頂初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀』の梵漢対訳版で

あり、「薩埵」と確定できる。

20 『梵漢兩字千手千眼觀自在菩薩脩行儀軌』一卷 俗字の「脩」を活字本は正字の「修」とする。

31 『梵漢兩字最上乘教授戒懺悔文』一卷 「懺」を活字本は欠く。「承和五年目録」23で見たが、『大正藏經』第十八卷・No.九一五『最上乘教授戒懺悔文』に当たり、活字本の記載は誤りである。

33 『梵漢兩字阿密利多軍荼利大神力陁羅尼』一卷、阿地多三藏与日昭三藏同譯 活字本は「地」の下に「瞿」を補う。「承和五年目録」7にも登場したが、阿地瞿多（生没年未詳）は唐代の訳經僧であり（『中華佛教人物大辭典』<sup>39</sup>）、活字本の記載で確定できる。

34 『梵字』一卷 活字本はこの書目を欠く。

37 『梵漢兩字大元阿吒薄句無邊甘露降伏一切鬼神真言』一卷 「句」を活字本は「拘」とする。『新求目録』の諸本の記載も同様である。

37と38の間に活字本は『觀自在菩薩如意輪念誦儀軌』一卷、不空三藏譯を記すが、青本はこれを欠く。

38 『十八會指歸』一卷 活字本はこの上に「金剛頂瑜伽」の字を加える。「承和五年目録」21にもあるが、『大正藏經』第十八卷・No.〇八六九も活字本と同じ記載であり、これが正式名である。

43 『悉談章』一卷 「談」を活字本は「曇」とする。『大正藏經』収載の各仏典中にはどちらも記載例が見られる。

46 『智者大師修三昧常行之法』一卷 「之」を活字本は欠くが、「承和五年目録」79、『新求目録』の青本も活字本と同じ記載である。

49 『阿弥陀經贊』一卷、沙門淨遐撰 「贊」を活字本は「讚」とする。

50 『淨名疏』四卷、沙門道液集 「集」を活字本は「撰」とするが、「承和五年目録」65の諸本も「集」としており、

この字で確定できる。

52 『浄名経関中疏釋微』二卷、條山沙門契真述「條」の上に活字本は「中」を加える。この字については「承和五年目録」66、『新求目録』の諸本も活字本の記載と同じであり、「中」の字を補うのが正確である。

54 『清涼山宋谷法師求法花三昧靈驗傳』二卷、上下 活字本は「法華三昧靈驗傳二卷上下、清涼山宋谷法師述」とする。「承和五年目録」106、『新求目録』の青本は『法花靈驗傳』二卷のみ記す。

55 『肇論抄』三卷、沙門惠澄撰 俗字の「抄」を活字本は正字の「鈔」とする。

56 『依肇論略出要義』一卷、沙門雲興撰 「依」を活字本は欠く。「承和五年目録」71の諸本及び『新求目録』の諸本は「依」の字を記さず、活字本の記載で確定できると考えられる。

活字本は59と60の間に『因明糅鈔』三卷、章敬寺擇隣撰が存在する。

60 『因明入正理論義纂要』一卷、沙門惠沼集 「理」を活字本は「現」とし、「義」を活字本は欠くが、「承和五年目録」74で見た通り青本の記載で確定できる。

63 『大般若経関』一卷 活字本は「関」を「開」とし、その下に「題」の字を補う。「承和五年目録」89でも異同が見られ、『新求目録』の諸本も「開」とする。「開題」は「仏教經典の題目について解釈し、その大要を述べる」(『岩波仏教辞典』) ことであり、活字本の記載で確定できるのではないであろうか。

次行の「已上八部二十卷」を活字本は「九部一十三卷」と記すが、59と60の間に『因明糅鈔』三卷を付加したためであり、「八部二十卷」と確定できる。

67 『廿九位法門』一卷 「承和五年目録」89、『新求目録』の写本は63の書目と合わせて『大般若経開兼廿九位法門』とする。

- 68 『佛性譚』一巻、沙門真覺述 歌の同字である「譚」を活字本は正字の「歌」とする。
- 72 『隋廬山遺愛寺慧珙禪師念佛三昧指歸』一巻 俗字の「珙」を活字本は正字の「珍」とする。
- 75 『内供奉談筵法師歎齊格并文』一巻 「筵」を活字本は「延」とする。「承和五年目録」112の諸本は「筵」、『新求目録』の青本・『全書』本は「延」とするが、「談筵法師」という僧侶については未詳である。
- 92と93の間、「已上六部十七巻」の「六部」を活字本は「十六部」とするが、活字本の記載が正しい。
- 93 「大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅」一鋪、五副 正字の「毗」を活字本は俗字の「毘」とする。「廬」を『大正藏經』本は「慮」とするが誤りである。また、「五副」を活字本は「三幅」とする。「承和五年目録」132の諸本、『新求目録』の諸本も「五」とし、青本の記載で確定できる。
- 107 「隋江陽永齊寺僧暎禪師影」一張 「承和五年目録」146でも見たが、「暎」を活字本は「映」とする。この影像についても未詳である。
- 113 「秦郡東寺老僧影」一紙 「承和五年目録」149に当たるが、これも未詳の影像である。
- 117 「判一百條々別二道」一帖 「々々」を活字本、「二」を『大正藏經』本は欠く。「承和五年目録」127と若干書名が異なる。
- 124 『祝元膺詩』一巻 「巻」を活字本は「帖」とする。「承和五年目録」128、『新求目録』の諸本も「巻」としており、この字で確定できる。
- 「別物 封皮箱一合」 一行目と五行目の「稱」を活字本は「爾」の同字である「爾」と記す。「圓仁の書に稱く」であり、青本の記載で確定できる。五行目の「大」を活字本は欠く。八行目以降に延暦寺三綱の署名が添えられているが、十行目の「上座傳燈住位僧」の「道叡」が活字本では「叡道」と逆になっている。この人物については詳

らかではなく、考察を要する。<sup>⑩</sup> 次行に見える「別當」の二字を活字本は欠き、この点検討を要する。

### おわりに

これまで二目録の諸本における本文の比定を行ってきたが、これを踏まえて諸本の記載の特徴を整理したい。『承和五年目録』の青蓮院本は俗字を多用しており、写本の性質の古さが窺われる。個人蔵本は正字の使用が多く見られるが、青蓮院本が記す正字に対して異体字を用いる場合や文字の脱漏、字を補う箇所も見られ、同じ前唐院本系統でありながら青蓮院本との性質は異なる。次に、二種の活字本の特徴として、判読不明とする箇所が見出し、「遮」を「舎」、「恵」を「慧」と書き換えを行い、「墮負」を「負墮」、「重軽」を「軽重」とするように文字の反転も見られ、青蓮院本との系統が異なることが窺える。また、「花」を「華」、「密」を「蜜」と記すなどの共通した記載の特徴から、その底本とした写本は個人蔵本の系統に近いと思われる。次に、『在唐送進録』であるが、諸本は基本的に『承和五年目録』と等しい特徴を持っており、青蓮院本は俗字、異体字の使用が多く、活字本との比較により誤字と判断できる部分も少なくない。次に、『大正藏経』本と『全書』本には青蓮院本に存在しない書目や、活字本の誤りか青蓮院本の脱漏か判然としない書目も見られる。欠字、誤字についても大部分の箇所が『大正藏経』本と『全書』本は一致しており、二種の活字本が底本とした写本の系統はきわめて近いといえるが、これら文字の異同と写本系統については、さらに考察を深める必要がある。

本稿では、これら二種の目録について基礎的考察を行い、目録に記載されている書目を概観したが、円仁は天台、密教経軌以外にも律、禪、浄土教、因明などを豊富にもたらしており、さらに当時流行していた詩集などの外典や図像、民間信仰を窺わせる物も含まれており、円仁は唐代仏教を受容する上で多様な関心を寄せてそれらを収集したといえる。

これらを踏まえ、二目録間における書目の相違及び将来物の内容分析をさらに深めることに加えて、『新求目録』の諸本に関する考察を行い、三目録に記載の内容から円仁将来物の特徴を分析する必要がある。すなわち、各々の典籍を分類した上でいかなる分野の仏典を将来したかを把握し、それらは最澄没後の天台教団における課題を背負った円仁がいかなる目的と状況の下で求得したのかという点、そして帰国後の円仁が比叡山における数々の宗教活動を展開していく上で求法の成果をいかにして取り込んでいったか、言い換えれば将来物が円仁を通して天台教団及び日本仏教界に与えた影響をも考察する必要があるが、それは機会を改めて述べることにしたい。

#### 〔追記〕

本稿は一般財団法人仏教学術振興会・平成二十六年年度『SAT大蔵経データベース』學術研究部門研究助成の成果の一部である。なお、『入唐新求聖教目録』高山寺本の写真版を御提供頂きました高山寺御当局、高山寺典籍文書総合調査団団長石塚晴通先生に厚く御礼申し上げます。

#### 註

(1) 高楠順次郎編『大正新修大蔵経』第五十五卷、目録部(大正新修大蔵経刊行会、一九七七年)一〇五五頁―一一二二頁。

(2) 高橋聖「遣唐僧による請来目録作成の意義―円仁の三種の請来目録を中心に―」(『史学研究集録』第二十六号、二〇〇一年)。高橋氏は、公的に入唐した僧には朝廷に求法の成果を報告する義務があったと指摘している。

- (3) 前掲注(1)。
- (4) 神田喜一郎「慈覚大師外典考証」(福井康順編『慈覚大師研究』天台学舎、一九六四年)。
- (5) 牧田諦亮「慈覚大師将来録より観たる唐仏教の一面」(福井康順編『慈覚大師研究』天台学舎、一九六四年)。
- (6) 小野勝年「入唐求法巡礼行記の研究」第四卷(鈴木学術財団、一九六九年) 卷末「附録 入唐新求聖教目録 并索引」五六七頁―六二八頁。
- (7) 拙稿「円仁将来目録の研究―『日本国承和五年入唐求法目録』と『慈覚大師在唐送進録』の成立過程―」(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』第十四号、二〇一五年)。
- (8) 石田尚豊「円仁の揚州求法について」(『青山史学』八号、一九八四年)。
- (9) 国宝・重要文化財総合目録編纂会編『国宝・重要文化財総合目録 美術工芸品編』上巻(ぎょうせい、一九九八年) 一一八頁。
- (10) 「e 国宝 国立博物館所蔵国宝・重要文化財」<http://www.emuseum.jp/>「円仁承和五年求法目録」。本稿では、資料①「日本国承和五年入唐求法目録」の底本とする青蓮院本もこのデータベースを参照した。
- (11) 前掲論文(8)、二〇六頁。
- (12) 「国指定文化財等データベース」<http://kunishitei.bunka.go.jp/>「円仁入唐求法目録〈開成四年四月二十日〉」。
- (13) 前掲注(9)。
- (14) 前掲注(10)、「日本国承和五年入唐求法目録」。本稿では、資料①の作成に当たって対校本とした個人蔵本に関しても、このデータベースを使用した。
- (15) 同右。

- (16) 前掲書(1)、No.二二六五、一〇七四頁。
- (17) 高楠順次郎、望月信亨編『大日本仏教全書』第二卷、「仏教書籍目録」二(大日本仏教全書刊行会、一九三〇年)四六頁。
- (18) 国宝・重要文化財総合目録編纂会編『国宝・重要文化財総合目録美術工芸品編』下巻(ぎょうせい、一九九八年)七五八頁。
- (19) 吉水藏聖教調査団編『青蓮院門跡吉水藏聖教目録』(汲古書院、一九九九年)五八八頁。
- (20) 本稿では、「慈覚大師在唐送進録」の青蓮院本は東京大学史料編纂所の撮影による写真版を使用した。
- (21) 小野勝年「前唐院見在書目録とその解説」(『大和文化研究』第十巻四号、一九六五年)二二頁。
- (22) 前掲書(1)、No.二二六六、一〇七六頁。
- (23) 前掲書(17)、五二頁。
- (24) 『大正藏經』所収の典籍については、「大正新脩大藏經テキストデータベース」<http://21.dzkl.u-tokyo.ac.jp/>、大蔵出版編集部編『大正新脩大藏經総目録』(大蔵出版、二〇〇七年)を確認した。
- (25) 前掲書(1)、No.二二七六、一一一三頁。
- (26) 前掲書(1)、No.二二六七、一〇七八頁。
- (27) 前掲書(17)、五八頁。
- (28) 小野玄妙、丸山孝雄編『仏書解説大辞典』縮刷版(大東出版社、一九九九年)。
- (29) 鎌田茂雄編『大藏經全解説大事典』(雄山閣出版、一九九八年)。
- (30) 中村元、福永光司、田村芳朗、今野達編『岩波仏教辞典』(岩波書店、一九八九年)。

- (31) 馬君武『神会和尚遺集―附胡先生晚年的研究―』（胡適紀年館、一九六八年）一一六一―一一七頁。「和上問<sub>二</sub>澄禪師<sub>一</sub>、修<sub>二</sub>何法<sub>一</sub>而得<sub>二</sub>見性<sub>一</sub>？」から始まる神会和尚と澄禪師の間答が見え、「素性は知れないが、「北宋」の立場を代表する禪者」であるとされる（小川隆『神会―敦煌文献と初期の禪宗史―』臨川書店、二〇〇七年）一一七頁。
- (32) 小野勝年『中国隋唐長安寺院史料集成』史料篇（法藏館、一九八九年）四〇五頁、及び解説篇の一、二頁参照。
- (33) 吳光燦「高麗了円撰『法華靈驗伝』について」（『印度學佛教學研究』第二十二卷二号、一九七四年）七七―七九頁。
- (34) 禪学大辞典編纂所編『禪学大辞典』（大修館書店、一九八五年）。
- (35) 前掲書（32）、一一〇頁。
- (36) 前掲論文（4）、九一―九三頁。
- (37) 前掲論文（5）、六九五頁。
- (38) 『慈覚大師伝』（『続群書類従』第八輯下）六九―七一頁。  
六月十五日、太政官送<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>件法<sub>一</sub>牒<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>寺家<sub>一</sub>、廿七日給<sub>二</sub>位記<sub>一</sub>、状云、伝燈法師位円仁、年五十、臘卅二、今授<sub>二</sub>伝燈大法師位<sub>一</sub>、勅、幽求<sub>二</sub>紀<sub>一</sub>、深入<sub>三</sub>三藏<sub>一</sub>、嗜<sub>二</sub>聖跡<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>竹林、聽<sub>二</sub>微言<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>宝月、非<sub>二</sub>唯止觀<sub>一</sub>之宗匠、寔是白黒之津梁、宜崇<sub>二</sub>伝燈之名<sub>一</sub>、載答<sub>二</sub>遊方<sub>一</sub>之効、
- (39) 張志哲主編『中華佛敎人物大辞典』（黄山書社、二〇〇六年）。
- (40) 『天台法華宗年分得度学生名帳』（比叡山専修学院附属叡山学院編『伝敎大師全集』第一卷、日本仏書刊行会、一九六六年、二五三頁）に、弘仁八年（八一七）の年分得度者二名のうち遮那業を専攻する学生として「一乗沙弥道叡」の名が見えているが、この道叡と同一人物であるかどうかは検討を要する。

凡例

- 一、本目録は青蓮院本（現京都国立博物館保管）を底本として作成した。
- 一、対校本として個人蔵本（現京都国立博物館保管）及び『大正新修大藏經』本及び『大日本仏教全書』本を使用した。本目録の下面に記載の校勘記においては、個人蔵本を「個」、『大正新修大藏經』本を「大」、『大日本仏教全書』本を「全」と省略した。
- 一、諸本の旁註は省略したが、青蓮院本の見返、奥書は記載した。また、二種の活字本は全て旧字体を使用しているが、本目録においては省略した。個人蔵本において旧字が使用されている箇所については記した。
- 一、全將來物に便宜上通し番号を付した。異同のある箇所には中黒のルビを振り、校勘記と対照させた。
- 一、本文の折り返し部分は等号（＝）を用いて表した。
- 一、異体字の字典に見当たらない文字については最も字形に近い漢字を用いて表した。
- 一、ここでは青蓮院本の記載に従い、可能な限り写本の字形に基づき翻刻を行うことに努めたが、この作業を踏まえて正字・旧字を規範とした校訂本文に改め公表する予定である。

資料①「日本国承和五年入唐求法目録」

(表紙見返)「青蓮藏本」(右下)

「慶安二季首夏上流之候加

修復畢」(左下)

日本国承和五年入唐求法目録

經疏章傳等壹佰參拾柒部、貳佰壹卷、茶羅并印契壇樣諸聖著影及舍利等

1 大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經一卷

2 一切佛心中心經一卷

3 寶星經略述并八宿佉盧瑟吒仙人經一卷

4 陀羅尼集要經一卷

5 蘓摩呼童子請經一卷

6 新譯般若心經一卷 般若三藏譯

7 阿利多軍荼利護國大自在拔折羅摩訶布陀羅金神力陀羅尼一卷

|| 阿地多三藏日照三藏翻本

8 金剛頂蓮花部心念誦儀軌二卷

9 觀自在菩薩如意輪念誦儀軌一卷 大興善寺不空譯

已上九部一十卷同帙

10 金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩脩行儀軌一卷

29 円仁将来目録の研究

【校勘記】

・個「国」。

・個「一百三十七部二百一」、大「二百三十漆部二百一」、全「二百參拾柒部貳百一」。

・個、大、全「吉」。

・大「二十」。

・個、大、全「陀」。

・大、全「蘇」。個、此下有「問」。

・個「訳」。

・個、大、全「陀」。

・大、全無「三藏」。

・個、大、全「華」。

・個「訳」。

・全「千」。

・全「于」。個無「千」。個、大、全「修」。

- 11 普賢菩薩金剛薩埵瑜伽念誦儀軌一卷 大興善寺沙門  
 12 金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密密行念誦儀軌一卷  
 13 金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀一卷 大興善寺  
 14 觀自在如意輪菩薩瑜伽法要一卷 金剛智譯  
 15 如意輪菩薩真言注義一卷  
 16 金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩念誦法一卷  
 17 葉衣觀自在菩薩法一卷  
 18 大佛頂諸菩薩萬行品灌頂部錄出中契契別行法門一卷  
 19 阿闍如來念誦供養法一卷 不空金剛譯  
   已上十一部一十卷同帙  
 20 脩真言三昧四時禮懺供養儀要一卷  
 21 金剛頂經·瑜伽十八會指歸一卷 大興善寺沙門·不空譯  
 22 佛頂尊勝陀羅尼注義一卷 大興善寺沙門·不空譯  
 23 取上乘教授戒懺悔文一卷 大興善寺沙門·不空譯  
 24 大元阿吒薄句無邊甘露降伏一切鬼神真言一卷  
 25 火壇供養及供養十天法一卷  
 26 施燠面一切餓鬼食陀羅尼法一卷  
 27 大樂金剛不空真實三昧耶經般若波羅密·多理趣釋一卷  
   已上八部八卷同帙  
 28 梵漢兩字大毗盧遮那經字輪品悉曇一卷  
 29 梵漢兩字金剛般若經二卷  
 30 梵漢兩字阿彌陀經一卷

·大、全此下有「不空譯」。  
 ·個無「密」。·個、大、全「修」。  
 ·個、大、全此下有「軌」。大、全無「大」以下。  
 ·個無「譯」。  
 個無此本。

·個「訊」。  
 ·個、大、全「二十」。  
 ·個、大、全「修」。  
 ·大、全無「經」。·大、全無「沙門」。·個「訊」。  
 ·個、大、全「陀」。個「訊」。  
 ·大、全「最」。·個「訊」。  
 ·大、全「太」。·個「无」。·個「呂」。  
 ·個「大」。  
 ·個、大、全「陀」。  
 ·個、大、全「蜜」。·個「釈」。  
 ·大、全「毘」。·大、全「舍」。  
 ·個、大、全「陀」。

31 円仁将来目録の研究

- 31 梵漢兩字般若心經一卷
- 32 梵漢兩字取勝無垢清淨光明大陀羅尼一卷
- 33 梵漢兩字不空羅索真言一卷
- 34 梵漢兩字青頸大悲真言一卷
- 35 梵漢兩字一切佛心真言一卷
- 36 梵漢兩字一切佛心中心真言一卷
- 37 梵漢兩字灌頂真言一卷
- 38 梵漢兩字灌頂真言·心中心真言一卷
- 39 梵漢兩字結界真言一卷
- 40 梵漢兩字秘密心真言一卷
- 41 梵漢兩字秘密心中心真言一卷
- 42 梵漢兩字普賢行願讚一卷
- 43 梵漢兩字大佛頂根本讚一卷
- 44 梵漢兩字大佛頂結讚一卷
- 45 梵漢兩字大隨求大結讚一卷
- 46 梵漢兩字大隨求結讚一卷
- 47 梵漢兩字天龍八部讚一卷
- 48 梵漢兩字百字讚一卷
- 49 梵漢兩字送本尊歸本土讚一卷
- 50 梵漢兩字弥勒菩薩讚一卷
- 51 梵漢兩字慈氏菩薩讚一卷
- 52 梵漢兩字觀自菩薩讚一卷

・大、全「最」。・個「无」。・個、大、全「陀」。

・大、全「□」。

大、全無此本。

・・大、全無「真言」。

大、全無此本。

・大、全、此下有「在」。

- 53 梵漢兩字虛空藏菩薩讚一卷  
 54 梵漢兩字金剛藏菩薩讚一卷  
 55 梵漢兩字文殊師菩薩讚一卷  
 56 梵漢兩字普賢菩薩讚一卷  
 57 梵漢兩字除蓋障菩薩讚卷  
 58 梵漢兩字地藏菩薩讚一卷  
 59 梵漢兩字滿願讚一卷  
 60 梵漢兩字毗盧遮那佛神變加持經·吉慶伽陀讚一卷  
 61 梵漢兩字釋迦如來涅槃後弥勒菩薩悲願讚一卷  
 62 梵漢兩字金剛經論頌一卷  
 63 梵漢兩字法華廿八品題目兼諸羅漢名一卷  
 已上三十六部三十七卷同帙  
 64 淨名經記五卷 一帙 無量義寺文襲述  
 65 淨名集解開中疏四卷 資聖寺道液集  
 66 淨名經開中疏釈微二卷 中條山沙門契真述  
 已上二部六卷同帙  
 67 法華經銷文略疏三卷 一帙 天長寺釋迦延秀集解  
 68 肇論略疏一卷 東山矩作  
 69 肇論抄三卷 牛頭山幽西寺惠澄撰  
 70 肇論文句圖一卷 惠澄撰  
 71 肇論略出要義兼注附焉并序一卷 沙門雲興撰  
 已上四部六卷同帙

·個無「師」。大、全「室利」。

·大、全「蓋」。

·大、全「毘」。·大、全「舍」。·大、全「結吉」。·個、大、全「陀」。

·個「釈」。

·大作「二十」。

··個「卅」。

·個「无」。·大、全「龔」。

·大、全「關」。·大、全「正」。

·大、全「關」。

·大、全「帖」。

·個「尺」。·大、全無「迦」。

·大、全「慧」。·大、全「證」。

·大、全「慧」。·個「證」。

·大、全「并」。·大、全「靈」。

- 72 因明採抄三卷 章敬寺擇隣述  
 73 因明義斷一卷 大雲苾芻沼述  
 74 因明入正理義纂要一卷 大神龍寺沼集  
 已上三部五卷同帙  
 75 劫章頌一卷  
 76 劫章頌疏一卷 岑山沙門遍知集  
 77 劫章頌記一卷 沙門道詮述  
 78 劫章科文一卷  
 已上四部四卷同帙  
 79 智者大師修三昧常行法一卷  
 80 五方便念佛門一卷 智者大師述  
 81 觀心遊心口決記一卷 智顛述  
 82 四十二字門義一卷 南岳思大師作  
 83 釋門自鏡錄五卷 僧惠詳集  
 84 觀心十二部經義一卷 天台頂述  
 85 形神不滅論一卷 靈溪沙門海雲撰  
 86 法花三昧修證決一卷  
 87 天台智者大師所著經論章疏科目一卷  
 已上九部一十三卷同帙  
 88 鳩摩羅法師隨順修多羅四悉檀義不墮負門一卷  
 89 大般若開兼廿九位法門一卷  
 90 量處重輕儀一卷 道宣緝叙

・個、大、全「採」。・個「教」。

・大、全「□」。

・大、全「□」。

・大「訣」。・大、全「者」。

・大、全「開」。・大、全「□」。

・大、全「慧」。

・個「漢」。

・個、大、全「華」。・大、全「訣」。

・大、全「負墮」。

・大、全「關」。・大作「二十」。

・・大、全「輕重」。・大、全「緝集」。

- 91 羯磨文一卷
- 92 略羯磨一卷 西大原寺懷素撰
- 93 說罪要行法一卷 義淨三藏撰
- 94 諸天地獄壽量分限一卷 終南山宗叡撰
- 95 受菩薩戒文一卷
- 96 寂上乘佛性歌一卷 沙門真覺述
- 97 大乘楞伽正宗決一卷
- 98 隋廬山遺愛寺慧殊禪師念佛三昧指歸一卷
- 99 梵語雜名一卷
- 100 四條式并大小乘戒決一卷
- 已上一十三部一十三卷同帙
- 101 南岳思禪師法門傳二卷 衛尉丞杜胙撰
- 102 天台大師答陳宣帝書一卷
- 103 天台略錄一卷
- 104 智者境松讀一卷 頂禪師撰
- 105 天台智者大師十二所道場記一卷 灌頂述
- 106 法花靈驗傳二卷
- 107 感通傳一卷
- 108 清涼山略傳一卷
- 已上八部一十卷同帙
- 109 大唐韶州雙峯山曹溪寶林傳十卷 一帙 會稽沙門雲微字明泳
- 110 上都清禪寺至演禪師鍾傳一卷 大理牛肅与僧至演同叙

· 個無「懷」。

· 大、全「最」。· 個「実」。

· 大、全無「決」。

· 個「恵」。· 大、全「珍」。· 大、全無「禪師」。

· 大「并」。· 大、全「訣」。

· 大、全「丞」。

· 大、全「宜」。

· 全「畧」。

· 個「極」。大「塚」、全「塚」。· 大、全「□」。· 大、全「述」。

· 大、全「場」。· 大、全「汀」。

· 個、大、全「華」。· 大、全「一」。

· 全「畧」。

· 大、全「部」。大、全「峯」。· 大、全「靈」。· 大、全此下有「序」。

· 大、全「師」。

- 111 南荊州・沙門無行在天竺國致於唐國書一卷
- 112 内供奉談筵法師歎齊格并文一卷
- 113 集新舊齊文五卷 上都雲花寺泳字太
- 114 觀法師奉答皇太子所問諸經了義并錢一卷
- 115 歎道俗德文三卷
- 已上八部一十二卷同帙
- 116 揚州東大雲寺演和上碑并序一卷 李邕撰
- 117 唐故大廣禪師大和楞伽峯塔碑銘并序一卷 陸巨撰
- 118 唐故大律師釋道圓山龕碑并序一卷 李邕撰
- 119 大唐大慈恩寺翻經大德基法墓誌銘并序一卷
- 120 大慈恩寺大法師基公塔銘并序一卷
- 121 唐故終南山靈感寺大律師道宣行記一卷
- 122 大唐西明寺故大德道宣律師讚一卷
- 123 天台大師答陳宣帝書一卷
- 已上九部九卷同帙
- 124 大唐新修定公卿士庶内族吉凶書儀卅卷 鄭餘慶重修定
- 125 開元詩格一卷 徐隱・秦・字蕭然撰
- 126 袂對義一卷
- 127 判一百條一卷 駱賓王撰
- 128 祝元膺詩集一卷
- 129 杭越寄和詩集并序一卷
- 130 詩集五卷

・個「洲」。大、全無「州」。・個「无」。・個「畫」。大、全無「書」。  
 ・大、全「并」。

大、全「上都雲華寺泳字大觀法師奉答皇太子所問諸經了義竝錢一卷」。

・個「洲」。大、全「并」。

・大、全此下有「上」。大、全「岑」。大、全無「銘」。大、全「并」。

・全「□」。・個「円」。大、全「龕」。大、全「并」。

・個「德」。・個、此下有「墓法」。大、全此下有「師」。大、全「并」。

・大、全「并」。

・個「德」。

・大、全「吉」。大、全「」。

・個「隱」。大、全「秦」。

・大、全「祇」。

・大、全「并」。

- 131 法花廿八品七言詩一卷  
已上一二部四十一卷同帙
- 132 大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅一鋪 五幅 白畫
- 133 金剛界大曼荼羅一鋪 七幅
- 134 供養賢聖等七種壇樣一卷
- 135 十七壇樣一卷
- 136 金剛界三十七尊種子曼荼羅樣一張
- 137 金剛界八十一尊種子曼荼羅樣一張
- 138 法花曼荼羅樣一張
- 139 胎藏曼荼羅手印樣一卷
- 140 南岳思大師示先生骨影一鋪 三幅
- 141 天台大師感得聖僧影一鋪 三幅
- 142 阿闍若比丘見空中普賢影一張
- 143 法惠和上闍王前誦法花影一張
- 144 山登禪師誦法花感金銀殿影一張
- 145 惠斌禪師誦法花神人來拜影一張
- 146 膜禪師誦法花善神來聽經影一張
- 147 定禪師誦法花天童給事影一張
- 148 惠向禪師誦法花滅後墓上生蓮花及墓裏常有誦經聲影一卷
- 149 秦郡老僧教弟子感夢示宿因影一張
- 150 道超禪師誦法花感二世弟子生處影一張
- 151 法惠禪師誦法花口放光照室宇影一張

- 
- 大、全「華」。
  - 大、全「華」。·大作「二十」。·大、全此下有「集」。
  - 大、全「毘」。·個「台」。
  - 個「福」。大、全「帙」。
  - 個「卅」。
  - 大、全「華」。
  - 個「一」。
  - 大、全無此本。
  - 大、全「慧」。·大、全「尚」。·大、全「華」。
  - 大、全「華」。
  - 大、全「慧」。·個、大、全「華」。
  - 大、全「映」。·大、全「華」。·個「聽」。
  - 大、全「華」。
  - 大、全「慧」。·大、全「華」。·大、全「誦有」。
  - 個無「師」。·大、全「華」。
  - 大、全「慧」。·大、全「華」。·個「張」。

152 大聖僧伽和尚影一張

153 舍利五粒

三粒·菩薩舍利 盛瑠璃小瓶、

二粒·支佛舍利 盛白鷓小合子 並納白石童子

前件法門等、圓仁、去承和五年八月到大唐揚州大都督府、巡歷城內諸寺、寫取如前、爰有終南山 宗叡和尚學達先達、悟究幽致、能解梵漢之語、妙閑悉曇之音、為向西天辭舊到府、圓仁幸得偶謁、受學梵天悉曇、兼習梵漢之語、又逢大唐內供奉豈弘阿闍梨付法弟子 全雅阿闍梨、諳稟秘法、和尚感乎遠誠、付以秘要、遂乃囑授念誦法門、并胎藏金剛兩部曼荼羅諸壇樣等、其後擬向天台、為行路遠還往還失時、有勅不許發赴、慨恨難及、所求法門雖未備足、且錄卷秩勘定如件、

大唐開成四年歲次起四月廿日天台宗請益傳燈法師位円仁録

(奥書)「嘉保二年七月十六日於南陽御房書了、

以前唐院之本寫得也」

・大、全「卷」。

・大、全無「粒」。・個「玉玉」。・大、全此下有「子」。

・大、全無「粒」。・大、全「蠟」。・個「并」。大、全「竝」。

・大、全「右」。・個「円」。・個「洲」。

・大、全無「有」。・大、全「邁」。・大、全無「之語」。

・大、全無「府」。・個「円」。

・個「和」。

・大、全「并」。・個「台」。

・大、全「問」。・個、此下有「之」。

・大、全「帙」。

・大作「二十」。・個此上有「大」。・個無「位」。

個「嘉保二年七月十六日於南陽御房書了、以前唐院之本寫得也云、保安四年七月廿九日於防門殿南亭寫了、一乘房御本也、求法勤息目貝」

凡例

- 一、本目録は青蓮院本（現京都国立博物館保管）を底本として作成した。
- 一、対校本として『大正新修大藏経』本及び『大日本仏教全書』本を使用した。本目録の下面に記載の校勘記においては『大正新修大藏経』本を「大」、『大日本仏教全書』本を「全」と省略した。
- 一、諸本の旁註は省略したが、青蓮院本の見返、奥書は記載した。また、二種の活字本は全て旧字体を使用しているが、本目録においては省略した。
- 一、全將來物に便宜上通し番号を付した。青蓮院本に記載されていない書目は丸括弧で示し、通し番号には含まないこととした。異同のある箇所には中黒のルビを振り、校勘記と対照させた。
- 一、本文の折り返し部分は等号（＝）を用いて表した。
- 一、異体字の字典に見当たらない文字については最も字形に近い漢字を用いて表した。
- 一、ここでは青蓮院本の記載に従い、可能な限り写本の字形に基づき翻刻を行うことに努めたが、この作業を踏まえて正字・旧字を規範とした校訂本文に改め公表する予定である。

慈覺大師在唐送進録

(表紙見返)「青蓮藏本」(右下)

「慶安第二初夏上旬之候加修復了」(左下)

天台法花宗請益圓仁法師且求所送法門曼荼羅并外書等目錄

大乘經律論梵漢字真言儀軌讀章疏傳記曼荼羅并傳法和上等影及外書等摺一百二十七部一百四十二卷

大乘經律論摺一十二部一十二卷

一梵漢字真言儀軌讀摺三十一部三十一卷

章疏傳記摺四十九部六十三卷

曼荼羅壇樣并傳法和上等影摺二十二部

外書摺一十四部一十四卷

大乘經律論

合一十二部一十二卷

1 法華經一部八卷 複一卷

2 新譯般若心經 一卷 般若三藏譯

3 梵漢對譯阿彌陀經 一卷

4 一切佛心中心經 一卷

5 梵漢陀羅尼集要經 一卷

39 円仁將來目錄の研究

・大、全「華」。・大、全「并」。

・大、全「并」。・大、全「尚」。・大、全「總」。

・大、全「總」。

・大、全「總」。

・大、全「總」。

・大、全「并」。・大、全「總」。・大、全「部」。

・大、全「總」。

・大、全無「心」。

・大、全「陀」。

・大、全無「心」。

・大、全「陀」。

・大、全無「心」。

・大、全「陀」。

- 6 大吉·祥天女經一卷
- 7 寶星經略述廿八宿·佉盧瑟吒仙人經一卷
- 8 蘓婆呼童子經一卷
- 9 金剛般若波羅密經一卷
- 10 金剛般若波羅密經一卷
- 11 說罪要行法一卷
- 12 梵漢對譯金剛經論頌一卷  
已上一十二部一十二卷同帙雜第一  
梵漢兩字真言儀軌讚
- 合三十一部三十一卷
- 13 梵漢兩字法花·儀軌一卷
- 14 梵漢兩字青頸大悲真言一卷
- 15 梵漢兩字無垢淨光真言一卷
- 16 梵漢兩字不空絹索真言一卷
- 17 梵漢兩字阿闍如來念誦供養法一卷 不空三藏譯
- 18 梵漢兩字觀自在如意輪菩薩瑜伽法要一卷
- 19 梵漢兩字金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵儀軌一卷
- 20 梵漢兩字千手千眼觀自在菩薩脩行儀軌一卷
- 21 梵漢兩字普賢金剛薩埵念誦儀軌一卷
- 22 梵漢兩字火壇供養及供養十天法一卷
- 23 梵漢兩字如意輪菩薩真言注義一卷
- 24 梵漢兩字佛頂尊勝陀羅尼注義一卷 不空三藏譯

·大、全「吉」。

·大、全「二十」。

·大、全「蘇」。·全作「重」。

·大、全「蜜」。

·大、全「蜜」。

·大、全「華」。

··大、全「菩」。

·大、全「修」。

·大、全「陀」。

41 円仁将来目錄の研究

- 43 悉談章一卷
- 42 施樵面一切餓鬼食陀羅尼一卷
- 41 金剛頂千手千眼觀自在菩薩念誦法一卷
- 40 大佛頂如來灌頂部錄中出印契別行法門一卷
- 39 修真言三昧四時禮懺供養儀要一卷
- 38 十八會指歸一卷
- 37 梵漢兩字大元阿吒薄句無邊甘露降伏一切鬼神真言一卷  
(觀自在菩薩如意輪念誦儀軌一卷 不空三藏譯)
- 36 梵漢兩字金剛界大曼荼羅秘密修行法門一卷
- 35 梵漢兩字葉衣觀自在菩薩法一卷
- 34 梵字一卷
- 33 梵漢兩字阿密利多軍荼利大神力陀羅尼一卷 阿地多三藏与日昭  
|| 三藏同譯
- 32 梵漢兩字隨求提目一卷 複八真言
- 31 梵漢兩字最上乘教授戒懺悔文一卷
- 30 梵漢兩字除壇上粉念此緣生偈讀一卷
- 29 梵漢兩字蓮花讚一卷
- 28 梵漢對譯普賢行願讚一卷
- 27 梵漢兩字法花經品題梵語兼諸羅漢名一卷  
已上一十五部一十五卷同帙雜第二
- 26 梵漢兩字釋迦如來涅槃後弥勒菩薩悲願讚一卷 複十二讚
- 25 梵漢兩字大佛頂根本讚等諸雜讚一卷

---

・大、全「華」。

・大、全「華」。

・大、全「華」。

・大、全無「懺」。

・大、全「陀」。・大、全此下有「瞿」。

・大、全無此本。

・大、全「拘」。

・大、全有此本。

・大、全此上有「金剛頂瑜伽」。

・大、全無「頂」。

・大、全「陀」。・大、全此下有「法」。

・大、全「曇」。

已上一十六部一十六卷同帙雜第三  
章疏傳記

合四十九部六十三卷

44 四十二字門義一卷 南岳思大師作

45 天台五時八教次第圖一卷

46 智者大師修三昧常行之法一卷

47 五方便念佛門一卷 天台大師記

48 法華經略疏三卷 上中下 弘文館大學士王縉撰

49 阿彌陀經贊一卷 沙門淨遐撰

50 淨名疏四卷 沙門道液集

已上七部一十二卷同帙雜第四

51 淨名經記五卷 沙門文襲集

52 淨名經闕中疏釋微二卷 條山沙門契真述

53 釋門自鏡錄五卷 複一卷 僧惠詳集

54 清涼山宋谷法師求法花三昧靈驗傳二卷 上下

已上四部一十卷同帙雜第五

55 肇論抄三卷 沙門惠澄撰

56 依肇論略出要義一卷 沙門雲興撰

57 肇論疏一卷 東山矩作

58 肇論文句圖一卷 沙門惠澄撰

59 大乘楞伽正宗決一卷

(因明釋鈔三卷 章敬寺擇隣撰)

·大、全無「之」。

·大、全「華」。·大、全「館」。

·大、全「陀」。·大、全「讚」。

·大、全「撰」。

·大、全「襲」。

·大、全此上有「中」。

·大、全「法華三昧靈驗傳二卷上下清涼山宋谷法師述」。

·大、全「鈔」。

·大、全無「依」。·大、全「靈」。

大、全有此本。

- 60 因明入正理論義纂要一卷 沙門惠沼集  
 61 因明義斷一卷 沙門惠沼述  
 62 量處重輕儀一卷 沙門道宣述  
 已上八部一十卷同帙 雜第六  
 63 大般若經闕一卷  
 64 略羯磨一卷 沙門懷素撰  
 65 劫章科文一卷  
 66 聖者名一卷  
 67 廿九位法門一卷  
 68 佛性謔一卷 沙門真覺述  
 69 清涼山略傳一卷 大花嚴寺記  
 70 荊州沙門無行和尚書一卷  
 71 感通傳一卷 沙門道宣述  
 72 隋廬山遺愛寺慧殊禪師念佛三昧指歸一卷  
 73 觀大師諸經了義一卷  
 74 上都清禪寺至演禪師鍾傳一卷 大理牛簫与僧至演同叙  
 75 内供奉談筵法師歎齊格并文一卷  
 76 歎齊文五卷 複一卷  
 已上一十四部一十四卷同帙雜第七  
 77 天台大師觀心誦經一帖  
 78 羯磨文一帖  
 79 南岳思禪師法門傳一帖上下 清信弟子衛尉承杜拙撰

---

・大、全「現」。・大、全無「義」。  
 ・大、全「集」。  
 ・大、全「九」。・大、全此下有「三」。  
 ・大、全「開」、此下有「題」。  
 ・大、全「二十」。  
 ・大、全「歌」。  
 ・大、全「華」。  
 ・大、全「珍」。  
 ・大、全「延」。・大、全「并」。  
 ・大、全「丞」。

- 80 釋迦如來賢劫記一帖
- 81 佛本內傳一帖
- 82 歸敬三寶并開題識詞一帖
- 83 持法花經三昧修證決一帖
- 84 受菩薩戒文一帖
- 85 歎德僧正等一帖
- 86 劫章頌一帖
- 87 劫章頌疏一帖 沙門遍知集
- 88 劫章頌記一帖 沙門道詮述
- 89 佛史寶林傳一卷 二帖
- 90 揚州東大雲寺演和上碑一帖
- 91 諸天地獄壽量分限一帖
- 92 七言法花經詩五十七首一帖  
已上六部十七卷雜第八  
曼荼羅壇樣并傳法和上等影  
合二十二鋪
- 93 大毗盧遮那大悲胎藏大曼荼羅一鋪 五副
- 94 金剛界大曼荼羅一鋪 七副
- 95 金剛界八十一尊種子曼荼羅一鋪
- 96 金剛界卅七尊種子曼荼羅一鋪
- 97 金剛界曼荼羅位樣一帖
- 98 法花曼荼羅位樣一張

·大、全「并」。

·大、全「華」。

·大、全「曹溪」。·大、全「十帖」。

·大、全「華」。

·大、全此上有「十」。

·大、全「并」。

·大、全「毘」。·大作「慮」。·大、全「三幅」。

·大、全「幅」。

·大、全「三十」。

·大、全「華」。

117	判一百條々、別二道一帖	
116	沙門清江新詩一帖	
115	杭越寄和詩并序一帖	
	合一十四部一十四卷	
	外書	
	已上二十二鋪納染泥皮箱一合	
114	陳曲水寺法惠禪師影一張	
113	秦郡東寺老僧影一張	
112	齊郡道超禪師影一張	
111	梁江陽禪衆寺僧定禪師影一張	
110	隋惠斌禪師影一張	
109	梁法惠禪師影一張	
108	惠向禪師影一張	
107	隋江陽永齊寺僧暎禪師影一張	
106	阿蘭若比丘像一張	
105	梁達山登禪師影一張	
104	僧伽和上影一張	
103	天台智者大師影一鋪 三副	
102	南岳思大師影一鋪 三副	
101	金剛面菩薩像樣一張	
100	金剛面豬頭菩薩像樣一張	
99	觀音壇樣一張	

---

・大、全無「々」。・大無「」。・大、全「映」。・大、全「幅」。・大、全「幅」。・大、全「幅」。・大、全「并」。・大、全無「々」。・大無「」。

118 祇對儀一帖

119 任氏怨歌行一帖 白居易

120 寒菊一帖

121 欒樂天書一帖

122 歎德文一帖

123 雜詩一帖

124 祝元膺詩一卷

125 雜詩一帖

126 前進士弛肩吾詩一卷

127 漢語長言一卷

128 波斯国人形一卷

已上一十四部一十四卷同帙雜第九

別物

封皮箱一合

件箱、請益法師圓仁書偈、般若理趣釋經一卷、梵字金剛經、梵本般若

心經、梵字金剛經論頌、梵語雜名、十七壇樣、護摩壇樣、胎藏手印樣、

五秘密儀軌等、持盛一箱、

全封不可開出、有一思故、不是惜法門者、

右得請益傳燈法師位圓仁書偈、且所求得新譯撰集法門、并兩部大曼荼

羅等、送延曆寺、凡真言儀軌等、唐國和上等、尤有深識之、不可妄散、

但其目錄先附第二船、粟田錄事者、仍且記錄如件、

・大、全「帖」。

・大、全「備」。

・大、全「備」。・大、全「并」。大、全無「大」。

別當

承和七年正月十九日都維那傳燈住位僧仁全

寺主傳燈住位僧治哲

上座傳燈住位僧道叡

・大、全「叡道」。

〔奥書〕「二校畢」

〔嘉承三年七月一日以三光房律師御本

書寫功既畢、院昭〕